



## 日本人の小名中に使用される「丸」の字

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00016787">https://doi.org/10.24729/00016787</a>

# 日本人の小名中に使用される「丸」の字<sup>1</sup>

大形 徹

## はじめに

古代の中国や日本では実名を隠し、幼いときは小名・幼名、成長してからは字や号で呼ぶ習慣があった。実名は本人そのものであり、それが明らかになると、呪術をかけられ、危害を受ける、と考えられていたからであろう。穂積陳重は「古代の「エジプト」人は実名及美名又は「大名及小名」のみ公にせられ、実名即ち「大名」は厳秘にして後世に伝はらず。「アビシニヤ」に於ても現時複名俗行はれ、実名の外に字あり。実名の外に字あり。実名は洗礼の時に受けたる名にして、之を厳秘し、若し人の之を知ることあらば、呪詛せらるるの虞ありとす<sup>2</sup>」と紹介する。その感覚が、さらに古い時代、広い地域に行われていたことがわかる。

古代の日本人の小名に「丸」という言葉が使われることがある。源義経の幼名は「牛若丸<sup>3</sup>」とされている。義経は鎌倉幕府を作った源頼朝の弟である。それまで政権を担当していた平氏の軍勢を打ち破った名将として知られる。この「丸」の由来は便器であるという。中国でいう「虎子」である。なぜ、そのようなものを名前に使用するのだろうか。



『牛若丸<sup>4</sup>』



青釉虎子  
西暦  
銅匠造(青蓮院西山青蓮社)  
高10.6、径22.2cm。  
圓筒形口、四脚作蹄状、右傾斜可動。  
現藏東京国立博物館。

青釉虎子<sup>5</sup>

これは日本および中国の宗教観念と深く関わっている。古代の人々は、神と人（生者）と鬼の世界で生きていた。人が亡くなれば鬼となる。鬼とは死者の靈魂のことである。人（生者）も靈魂を持っている。人の靈魂は夢を見る時に人の身体を抜け出すと考えられていた。またひどく驚いた時にも身体を抜け出す。生者の靈魂は抜け出しても再び身体に戻ってくる。

人と鬼、善神と悪鬼という枠組みの宗教的・疾病観念のもとでは、人が悪鬼に魂を奪い取られると病気となり、死亡すると考えられた。そのような疾病観念のことを「鬼系の病因論<sup>6</sup>」と定義して考察したことがある。小児が死亡しやすいのは、まだ完全に閉じていない頭の凶門から、悪鬼に魂を抜かれやすいからであろう。それを防ぐための方策が、さまざまに考え出された。



悪鬼も人と同様に汚いもの、臭いものが嫌いである。そのため、疾病をもつ人の患部に動物の尿などを塗った。体内に入り込んで患部に潜む悪鬼は、その臭いに閉口して、体外へと逃げ出す。そして疾病は治るという構造である。

悪鬼に取りつかれないように、あらかじめ、予防することがある。その一つが、小児の幼名や小字に、悪鬼の嫌がる汚い名前、臭い名前をつけることなのだろう。

拙稿では、その例として、日本の小児に多くつけられた「丸」について考察する。

## 一、『韓非子』にみえる鬼を祓う方法としての「矢（屎）」

『韓非子』には「矢（屎）」に関する話が連続してあらわれる<sup>7</sup>。便宜上、a・bで示した。

「矢」は「屎（甲骨文の字形   <sup>8</sup>）」と同音であり、「屎」の假借として使用される<sup>9</sup>。人が排泄する会意文字<sup>10</sup>である。

a 燕人<sup>まど</sup>惑<sup>みだ</sup>易<sup>いぬ</sup> <sup>くそ</sup>矢<sup>ひそ</sup>を浴ぶ。燕人、其の妻、私かに士に通ずる有り、其の夫、早く外自りして來たる、士<sup>たま</sup>適<sup>たま</sup>たま出づ。夫曰く、何れの客なるや、と。其の妻曰く、客無し、と。左右に問うに、左右、有る無し、と。言うこと、一口より出づるが如し。其の妻曰く、公、惑<sup>たま</sup>易<sup>たま</sup>なり、と。因りて之に浴ぶするに狗矢を以てす<sup>13</sup>。

b 一に曰く、燕人李季遠出を好む、其の妻私かに士に通ずる有り。季、突かに至り、士、内中に在り、妻、之を患う。其室婦曰く、公子をして裸にして髪を解

き直ちに門を出でしめよ、吾が屬<sup>ともがらいつわ</sup>伴りて見ざるとするなり、と。是に於て公子其の計に従い、疾走して門を出づ。季曰く、是れ何人なるや、と。家室皆な曰く、有る無し、と。季曰く、吾れ鬼を見しや、と。婦人曰く、然<sup>しか</sup>り、と。之を爲すと奈<sup>いかん</sup>何せん、と。曰く、「五姓<sup>くそ</sup>の矢を取り之を浴びよ（一に云う、尿、と）。季曰く、諾、と。乃ち浴ぶるに矢を以てす。一に曰く、浴ぶるに蘭湯を以てす、と<sup>14</sup>。

bの話の方が詳しく、内容も面白い。おそらく、aの話が元になり、それに付加する形でbの話が作られたのであろう。

この話の眼目は多くの人が同じことをいえば、それが正しくない場合も信じ込まされてしまうというところにある。しかし、その結果として、「犬の矢（＝尿）」あるいは「五牲（牛・羊・豚・鶏・犬）の矢（一説、尿）」という汚物を身体に浴びることとなったというところも共通している。

bの話では、まずが被髪と考えられていたことがわかる。被髪<sup>まき</sup>の鬼を見た者はひどく恐れた。一般に鬼は目に見えない。しかし、「人且<sup>ま</sup>に死せんとするとき鬼を見る<sup>15</sup>」と、危篤の人が鬼を見るとされていた。自分が鬼に近づきつつあるため鬼を見ると理解されていたのだろう。そこで鬼に取りつかれることを避けるために、鬼のいやがる汚物を体に塗りたくって鬼を追いはらうということとなる。

ここは妻に密通された上に体に汚物を塗る羽目に陥った男を笑う話として記されている。しかし、このような悪霊祓いの方法は実際にあった。

### 三、『五十二病方』にみえる「矢（屎）」を使用した治療法

前漢初期の出土資料に『五十二病方<sup>16</sup>』という書物がある。五十二種類の処方が記されており、呪術的な治療法も数多く記されている。それは、病の原因が悪鬼によって引き起こされるという考え方にもとづいている。そこには弓矢の矢も呪術的に使用される。しかし、「矢」と同音で屎の意味をもつ「矢」も10箇所以上あらわれる。

たとえば、刃物の傷には、「以刃傷、燔羊矢、傅之<sup>17</sup>」とあり、「羊の矢（屎）」を焼いたものを患部につけるようである。また、犬に咬まれたときは、「丘（蚯）引（蚓）矢二升<sup>18</sup>」と「蚯蚓の屎」、二升を使う。また癩疾には、「犬矢（＝屎）<sup>19</sup>」を使う。他に、「馬矢<sup>20</sup>（＝屎）（陰囊腫大）」、「鼠（いのこ）矢<sup>21</sup>（＝屎）（やけど）」、「牡鼠矢<sup>22</sup>（＝屎）（皮膚病）」、「豕矢<sup>23</sup>（＝屎）（漆かぶれ）」、「雞矢<sup>24</sup>（＝屎）（漆かぶれ）」、「雄雞矢<sup>25</sup>（＝屎）（虫に食われる）」等が記され、五牲の屎以外のものも含まれている。人の嫌がる汚いもの

は鬼も嫌がるため、それらを用いて体内に入り込んでいる鬼を追いはらおうという発想であろう。

このような治療法は、日本の丹波康頼（912-915）の『医心方』にも受け継がれており、服薬禁物第六、石薬中毒には、「野芋ヤマサトイモの毒、…糞汁が解毒する<sup>26</sup>」と「糞」が使用される。「白鴨矢解之（白鴨の矢クソ、之を解す）」の「矢」には「クソ」というルビがふらされている。それは「矢」の音読みが「シ」なので、同音の「屎」（シ）の通仮字とされたからである。これも「糞」の意味である。汚物を服用して毒物を嘔吐させたのかもしれない。しかし、「解」つまり「解毒」と記されている。それらの処方、明、李時珍（1518-1593）の『本草綱目』にまで受け継がれており、そこでは「屎」の文字が467箇所もあらわれる。

#### 四、「虎子」の意味

中国語の「虎子」に関しては、1. 小虎、乳虎（子どもの虎、赤ちゃんの虎）<sup>27</sup> 2. 喻勇健の男孩（勇敢男の子の喩え）<sup>28</sup> 3. 便壺（おまる） という三つの意味がある。1. 2. に関しては注釈中に例文をあげておいた。3. 便壺は「おまる」である。「虎が伏せた形状で作ったので、そう名づけた。陶器、瓷器、漆器あるいは銅で制作されることが多い、漢代の王室貴族は、玉でつくることもあった<sup>29</sup>」とあり、これが虎の形をした便壺であるとわかる。ただ、なぜ虎の形にしたのかについては説明がない。

A 漢、魏、南北朝の古墓に中では常に虎子を随葬品としている<sup>30</sup>。

B 漢應劭、『漢官儀』卷上に、侍中は……乘輿のもの、身につけるものから、下は褻器や虎子の属に至るまで分担して掌っている<sup>31</sup>。

C 唐、陸龜蒙の「奉誦<sup>32</sup>襲美<sup>33</sup>苦雨見寄」詩に、「唾壺、虎子すら尽く能く執り、痔しを舐め、枝し（肢）を折ることすら辞する所無し<sup>34</sup>」とみえる。

D 章炳麟『官制索隱』、漢初の侍中、唾壺を奉ずるに非ざれば、即ち虎子を執る<sup>35</sup>

の例が紹介される。

ここでは、「褻器」や「唾壺」と対比されて使用されている。「痔を舐める」は『莊子』列禦寇篇に、秦王の病を治した医者のうち、「痔を舐むる者、車五乗を得<sup>36</sup>」とみえる。「枝を折る」は『孟子』梁恵王上に、「長者の為に枝を折る<sup>37</sup>」とみえる。これには「折枝」でなく、「折肢」の意味だという説がある<sup>38</sup>。

「虎子は溺<sup>いばり</sup>を盛るの器」<sup>39</sup>とされている。『周礼』巻六に「褻器」とみえ、その鄭司農の注に「褻器、清器、虎子の属<sup>40</sup>」とある。その「虎子」に対する説明である。

## 五、「小字」としての虎子

隋巢元方撰『巢氏諸病源候総論』巻四十六、小兒雜病諸候には、「小兒は神氣軟弱、精爽微羸にして、神魂、鬼に持録せらる<sup>41</sup>」とみえる。小兒の魂は弱いため、悪鬼に連れ去られやすい。

南宋、陳思（1225-1264）撰『小字録<sup>42</sup>』には、小兒の時の字が多数、収録されている。悪鬼・悪霊に魂を連れ去られないようにするための「小字」という観点から『小字録』の字を考察してみたい。

「虎子 謝據、字は玄通、吏部尚書、哀の第二子、小字は虎子、中郎と號す。世説序録<sup>43</sup>」と、みえる。この「虎子」は、「虎の子ども」という本来の意味かもしれない。しかし、さきにみたように、「おまる（便壺）」の意味もあり、その意味にも聞こえるのである。意味を重ねているのかもしれない。そうだとすれば、悪鬼が汚いものを避けることから、その害を避けるためにつけられたという意味をも含んでいるのかもしれない。

『小字録』以外にも「虎子」は多くみえる。呉越の忠懿王錢俶（929-988）は「忠懿王、小字、虎子<sup>44</sup>」とされ、米友仁（1074-1153）も「…元暉、復た小名、虎子<sup>45</sup>」とされる。さらに、宋（960-1279）の陳達叟『采異記』伏龜山鐵銘に「淮海王、小字、虎子<sup>46</sup>」とされる。これも「虎子」で、虎の子かもしれないが、「おまる」の意味にも聞こえると思われる。

宋、徐鉉（916-991）『稽神録<sup>47</sup>』に、（163-212）の曾孫で魏末晋初あたりの人である荀愷<sup>じゆんがけい</sup>のことを記す。「荀氏家傳に曰く、荀愷字は茂伯、<sup>おさな</sup>小くして<sup>さと</sup>智し。外祖晉宣王、甚だ之を器とし、字して虎子と為し、弟の悝、龍子と為す<sup>48</sup>」とある。「字は茂伯」と、まず記される。そのあとに、「<sup>おさな</sup>小くして<sup>さと</sup>智し」とあり、つづけて、「字して虎子と為す」とみえるので、「虎子」の方は小字であろう。ただ、「虎子」と「龍子」が組み合わせられているため、ここは褻器の虎子ではない。

『小字録』では、「虎子」以外に「虎兒」がみえる<sup>49</sup>。また、「虎」のつく小字は、「班虎<sup>50</sup>」「虎牙<sup>51</sup>」などがある。それらは猛獸の「虎」ということに意味があるのだろう。

『漢書』司馬相如伝には、「司馬相如、字は長卿、成都の人、少名、犬子<sup>52</sup>」とみえる。これは「犬子」という少名（=小字）である。「張敬兒」はもと、「狗兒」であったが、「宋の明帝、狗兒の名の鄙しきを嫌いて、改めて敬兒と為す<sup>53</sup>」と、その名は、鄙しい、ある

いは田舎くさい、とみなされたようである。「狗児」がそうなら「犬子」もそうであろう。

「桃符<sup>54</sup>」、「桃筒<sup>55</sup>」はいずれも鬼が恐れるとされたものである<sup>56</sup>。「鐵山<sup>57</sup>」、「生鐵<sup>58</sup>」、「鐵胡<sup>59</sup>」、「堅石<sup>60</sup>」、「石頭<sup>61</sup>」等は鉄や石のように堅いものには、悪鬼も菌が立たないということであろう。

## 六、朝鮮語の「マリオプタ」「マル」と日本語の「丸」

大阪外国語大学朝鮮語研究室編『朝鮮語大辞典』角川書店、1986年には、

**마렵다** マリオプタ marjɔpʰta 影[日→ウ] (大便<sup>ㄷ</sup>・小便<sup>ㄹ</sup>を) 催<sup>ㄷ</sup>す、したい: 변이 ~ 便意を催す; 오줌(똥)이 마려워 못 견디겠다 小便(大便)がしたくてたまらない; 엄마, 오줌 마려워 お母さんおしっこ(したい). 1) 日本語「放<sup>マ</sup>る(大小便をする)」と同源とする説がある(李崇寧説). くそまる(送糞・大便). \*오줌(똥)을 보다(누다) (小便「大便」をする).

という例が記されている。

読み方は、「マリオプタ」であるが、これは「(1) 日本語「放(ま)る(大小便をする)」と同源とする説がある(李崇寧説<sup>62</sup>)。くそまる(送糞・大小便)」とされている。

日本語には朝鮮由来のものが多くある。しかし、朝鮮語と「丸」については、江戸の学者や南方熊楠等の指摘はない。

RZ<sup>63</sup>さんによれば、「韓国も昔は子供が生まれると、子供に「犬<sup>ㄱ</sup>・石<sup>ㄹ</sup>・くそ<sup>ㄷ</sup>=糞」などの汚い名前をつけた(幼名)。ラフな感じの名前を付けると、その子の人生は逆に平坦になれると信じたわけだ。こういう文化が中国や日本でもあったのが面白い<sup>64</sup>」という。韓国も昔は、「犬<sup>ㄱ</sup>・石<sup>ㄹ</sup>・くそ<sup>ㄷ</sup>=糞」という汚い名前をつけたという。「犬」や「石」は先にみた『小字録』にも見えた。

水野直樹氏のpdf資料36頁の16世紀の古文書にも奴婢の資料として「朱屎」という名前があげられている<sup>65</sup>。また日韓併合時の朝鮮語固有語彙による名の制限の例として、「介同(ケットン=犬の糞)」があげられている<sup>66</sup>。

## 七、中国語の「臭臭」等の幼名

WY<sup>67</sup>さんによれば、「確かに中国においては、人が生まれてから赤ちゃんの幼名は

ほとんど「臭臭」です」と「臭臭」が現代の中国の普遍的な幼名だという。FS<sup>68</sup>さんによれば、「chouchou」という発音は、「むしろ可愛く聞こえる」という。LJ<sup>69</sup>さんによれば、「村に僕より年上の世代には「○○狗、○○牛」のような賤しい名前がたくさんあります」。WX<sup>70</sup>さんによれば、「非常に汚いものが悪霊に嫌われるから魔除けの効果があります」、「狗狗」「狗剩」もあるという。CR<sup>71</sup>さんによれば、「昔、魔をよけるために「狗血」とか汚いものをよく使っていました」という。

つまり、現在もまだ昔の感覚をひきずった幼名が存在していることがわかる。また、それが「むしろ可愛く聞こえる」というのは、日本で「丸」が可愛らしいイメージをもつようになることと共通している。

## 八、岡西惟中『消閑雑記<sup>72</sup>』の「丸」の説明

岡西惟中（1639～1711）『消閑雑記』中巻に、

人の名に丸といふ字をつく事まるは不浄を入る器也不浄は鬼魔のたくひも嫌ふもの也されは鬼魔の類ちかつかさる心を祝して名の下につく心也古今集の作者に屎といひ貫之か幼名をあこくそといふ類おほし…。

とみえる。

人の名前に「丸」がつくことは、不浄すなわち屎を入れる器を「虎子<sup>おまる</sup>」ということからきている。また紀貫之の幼名を「あこくそ」というのは名前に「くそ=屎・糞」が入っている。これらは、みな鬼魔もまた人と同様に不浄のものを嫌うために、鬼魔を避ける呪文のような意味あい、そのような名前をつけたのだという。

『古今集』の作者の一人が紀貫之（866[872]-945）である。その幼名を「阿古久曾<sup>あこくそ</sup>」という。この「久曾<sup>くそ</sup>」が「屎<sup>くそ</sup>」・「糞<sup>くそ</sup>」だとするのである。

日本語の「くさめ」の語源の一つに「糞食<sup>くそは</sup>め」というものがあり、それは沖縄では「クスケ=糞食え」だとされている。くしゃみをした瞬間に体内に入り込もうとする悪鬼に対して「糞食らえ」という呪文であろう<sup>73</sup>。

## 九、『熊楠漫筆<sup>74</sup>』の記述

岡西惟中の『消閑雑記』にいわく、「人の名に丸という字を付くること。丸は不浄を



容るる器なり。不浄は鬼魔の類も嫌うものなり。されば鬼魔の類近づかざる心を祝して、名の下に付く心なり。『古今集』の作者に屎くそといい、貫之が幼名を、あこくそという類多し」。…後略…

先にあげた『消閑雑記』の記述をそのままとりあげて紹介している。これは後に紹介する、船の名前になぜ「丸」をつけるのかという考察の基礎になる部分であろう。

## 十、船の名前に「丸」をつけること

『南方熊楠を知る事典<sup>75)</sup>』は、NATURE、1907.817の「丸」という論文について、次のように解説する。

…結局、三カ月間かけて書き上げられた答文が『ノーツ・アンド・ティアリーズ』に送られたこと、それがやがて親愛を表わす呼び名として定着したことを論ずる。そして、そのような使い方から「丸」はさらに稚児や、愛用の馬、牛や闘鶏、刀に用いられるようになる。そうなると、船の名前として用いられはじめるのも時間の問題である。とりわけ、航海は人生の岐路ともいべき大きな役割を持つものであったから、船に対する思い入れが強くなるのも当然の話であろうというのである。こうして、秀吉が一五九一年に建造した船を「日本丸」と呼んだ頃から、船名の「丸」が用いられるようになったことを、熊楠は指摘する。…

前半の省略した部分は、先にとりあげた内容とほぼ同じである。そのあと、この不浄な器をあらわす「丸」が、「やがて親愛を表わす呼び名として定着した」と述べている。

## おわりに

神がいて、鬼がいる。「魂」が存在し、それが抜け出してしまうと人は死亡する。小児の死亡率が高いことは、まだ完全に閉じきっていない凶門から、悪鬼によって魂が抜き取られてしまうことと関連する。中国の古代にはそのような確固とした宗教観念が存在した。そしてそれは朝鮮半島や日本にも伝わっていた。さきにみたようにその宗教観念の上に医学の疾病観念が存在したわけである。中国・朝鮮・日本は文化的に大きな共通の基盤の上にあったといえる。

ふだんの生活では実名は隠さねばならない。実名を知られると呪術をかけられるから

である。実名の代わりに小字や字などをつけた。とくに小児は悪鬼に襲われることを恐れて、悪鬼の嫌がる汚い名前をつけた。中国の小字に「虎子」というものがあり、それは、勇猛な虎の子ども以外に便器の意味でもある。たとえ、勇猛な虎の子を意識して、つけた名であっても、「おまる」にも聞こえるのである。日本では「虎子」を「まる」と呼ぶが、それは「丸」という漢字で記された。日本語の「まる」という呼び名は、朝鮮語の発音からきているのかもしれない。日本の名前の「あくそ」、韓国の「介同(ケットン=犬の糞)」、中国の「臭臭」も根柢はつながっているように思われる。

岡西惟中や南方熊楠は、なかば直感的に論を立てている。しかし、出土資料や『小字録』、さらに韓国の事例などを検討したとき、岡西惟中や南方熊楠の考え方はまちがっていなかったと思われる。また中国や韓国の留学生のコメントにより、その考え方がいまでも東アジアの共通する宗教感覚として生きていることに気づかされるのである。

## 【注】

1 拙稿は2018年9月12日にNHKで放映された「ネーミングバラエティー 日本人のおなまえっ! 【船の〇〇丸の謎】」にもとづく。この内容について問い合わせを受けたのである。船の「丸」については、つとに南方熊楠が考察を加えており、そのことはよく知られている。そのため、私に問い合わせる必要などないのである。

番組のディレクターの方にそのことをうかがうと、科研費の研究課題「タマシイの観点からみた中国を中心とする東アジア辟邪文化の総合的研究(基盤研究(C))」、課題番号16K02158、研究代表者 大形徹」に、「辟邪」とあったことから連絡したのだという。なるほど、この問題を「辟邪」の観点から捉えていたのである。

論文であれば、自分で問題を設定し、それに答えるということになる。拙稿はそうではない。頼まれたから調べて答えた。そのため、「研究ノート」とした。ただ、拙文では南方熊楠の当時、見ることのできなかつた中国の新出土資料などを加えて考察している。結果、南方熊楠の説を補強したことになる。

番組は好評であったが、終了後、大学の広報にメールが届いた。私の述べたことの根拠がどこにあるのかわからない、というものであった。バラエティ番組という性格上、わかりやすくまとめられ、提供した岡西惟中や南方熊楠の資料等は全く紹介されなかつたのである。質問者は、名前から、関西の某有名私立大学の教員であると知れたため、根拠とした文献資料等をお送りした。ただ、それに対しては梨の磔で何の連絡もない。

その後、2019年9月7日、中国社会科学論壇(2019・宗教学)“宗教学研究的传承与创新”国際学術会議において、大形徹「日本人小名中使用的「丸」字與辟邪觀念」(翻

訳、董涛)として発表した。時間は13分である。原稿は予稿集に収載されている。思いがけず、評議人の復旦大学、陳納教授から激賞された。そして会場の参加者に対して、「この発表はとても面白いので、時間の関係で省略された部分も含めて全文読んだ方がよい」とまで、おっしゃってくださいました。

拙稿はその内容を日本語に戻し、加筆したものである。中国での発表では、日本のことも丁寧に紹介するようにつとめている。冒頭に日本人ならだれもが知る日本の童話の牛若丸をあげたのは、そのためである。

発表には文献や出土資料だけではなく、準備過程で得た中国や韓国の留学生の感想や意見を含めた。これは私にとって非常に興味深いものであった。中国や韓国では古代からの感覚が現代にいたるまで綿々と脈づいていることがわかったのである。こういった民族の歴史感覚を背負った個人の感覚というのは、我々、日本人にはわからない。

2 穂積陳重著『實名敬避俗研究』刀江書院、1926年、225頁。旧字体を新字体に変換して表記した。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1020191> この書のちに、『忌み名の研究』と改題し、穂積陳重著、穂積重行校訂として、1992年に講談社学術文庫 [1017] に入れられる。

3 大津雄一他編『平家物語大事典』東京書籍株式会社、2010年、419頁に「源義経みなもとよしつね 平治一年(一一五九)～文治五年(一一八九)。源義朝の末子。母は九条院雑仕常葉。幼名牛若丸」とみえる。『吾妻鏡』『平治物語』『義経記』に拠る。

4 松田松雄(1937-2001)画、富士屋書店、出版年不明。中国で発表したため、日本の子供向けの書籍を紹介した。

5 西晋 浙江温州市弥来陀山西晋墓出土。高10.8、長22厘米。円筒形口、四肢作蹲伏状、両側刻劃羽翼。現蔵浙江省温州市博物館。『中國美術全集』陶瓷器二 李輝柄主編 黄山書社 2010年 中國美術全集 / 金維諾総主編、274頁。

6 大阪府立大学紀要 人文・社会科学 (43)、p1-15、1995。<http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10466/12367/1/2009202079.pdf>。

7 拙著『魂のありか』角川書店、2000年、94頁の内容にもとづき、加筆修正した。

8 白川静『字通』電子版、尿より。

9 同上「訓義」に「1くそ。字はまた矢を用いることがある」とされる。

10 同上に「[会意]尸(し)+米。尸は尾・尻の字形にみられるように尾部を示し、米は尿の象形」とみえる。

11 四部叢刊初編、景上海涵芬樓藏景宋鈔校本、及び欽定四庫全書本『韓非子』は「無惑」とするが、王先慎『韓非子集解』内儲説下(掃葉山房、清光緒22 [1896] 序)の以

下の注釈に従って「惑易」に変えた。「先慎曰く、乾道本、「惑易」を「無惑」に作る。案ずるに「無惑」なれば則ち浴びず。下文、「公惑易也」なり。明らけし、「無惑」は乃ち「惑易」の譌。今、張榜本に據りて此の條を改む。(先慎曰、乾道本、「惑易」作「無惑」。案「無惑」則不浴矣。下文、公惑易也。明「無惑」乃「惑易」之譌。今據張榜本改此條)。「 」をつけてわかりやすくした)。「惑易」は、白川静『字通』は「まどい乱れる」とする。『韓非子』には「惑乱」という語が二例あらわれる。『漢語大詞典』は、この箇所をあげ、「精神失常」という。

12 原文は「惑易」。前注で述べたように、この語をもとにこの段落の最初の「無惑」を「惑易」に変えた。ただし、「惑易」自体わかりにくい。「惑易」の語順の方がわかりやすいが、そのような版本はない。

13 燕人惑易、故浴狗矢。燕人、其妻有私通於士、其夫早自外而來、士適出、夫曰、何客也。其妻曰、無客。問左右、左右言無有、如出一口。其妻曰、公惑易也。因浴之以狗矢。

14 一日、燕人季季好遠出、其妻私有通於士、季突至、士在中、妻患之。其室婦曰、令公子裸而解髮直出門、吾屬佯不見也。於是公子從其計、疾走出門。季曰、是何人也。家室皆曰、無有。季曰、吾見鬼乎。婦人曰、然。為之奈何。曰、取五姓之矢浴之(一云尿)。季曰、諾。乃浴以矢。一日浴以蘭湯。(欽定四庫全書、『韓非子』卷十、元何芥註、内儲說下六微、第三十一)。

15 人且死見鬼。(欽定四庫全書、漢王充撰『論衡』卷二十、論死篇)。

16 小曾戸洋、長谷部英一、町泉寿郎著、馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編『五十二病方』馬王堆出土文献訳注叢書、東方書店、2007年、その他を参照。

17 『五十二病方』010

18 『五十二病方』061

19 『五十二病方』112

20 『五十二病方』221

21 『五十二病方』339

22 『五十二病方』371

23 『五十二病方』402

24 『五十二病方』404

25 『五十二病方』421

26 「野芋毒、…糞汁解之」。『本草経集注』『証類本草』等に同様の記述がある。

27 西晉、陳壽(233-297)『三国志』呉志、呂蒙伝、「不探虎穴、安得虎子」。劉宋、范曄(398-445)『後漢書』班超伝、「不入虎穴、不得虎子」。『漢語大詞典』の解釈に拠る。

- 28 『三国志』呉志、凌統伝、「二子烈封、年各數歲、權內養於宮、愛待與諸子同、賓客進見、呼示之曰、『此吾虎子也』」、『漢語大詞典』の解釈に拠る。
- 29 因形作伏虎狀、故名。多以陶、瓷、漆或銅制作、漢代王室貴族亦有以玉為之者。前掲『漢語大詞典』。
- 30 漢、魏、南北朝古墓中常以虎子作為隨葬品。
- 31 漢、応劭『漢官儀』卷上、「侍中……分掌乘輿服物、下至褻器虎子之屬」。
- 32 『漢語大詞典』と『全唐詩』は「酬」だが、欽定四庫全書、『甫里集』卷十三、唐陸龜蒙撰、欽定四庫全書、『松陵集』卷十は「酬」である。
- 33 「襲美」は皮日休の字。
- 34 唐、陸龜蒙、「奉酬襲美苦雨見寄」詩、「唾壺虎子盡能執、舐痔折枝無所辭」とみえる。この詩は皮日休「吳中苦雨因書一百韻寄魯望」詩に「苦雨」をテーマに唱和したものである。
- 35 章炳麟『官制索隱』、「漢初侍中、非奉唾壺、即執虎子」。
- 36 「舐痔者得車五乘」。
- 37 為長者折枝。
- 38 李強、大形徹「中国按摩推拿医学の歴史 その一」、人文学論集、34、105頁、「折枝」を参照。「枝」を「肢」の意味でとらえれば、長者のために、身体を折り曲げることになり、長者に按摩のような術をほどこしている、と解釈できる。陸龜蒙の詩の中では、そのようにとらえた方がわかりやすい。
- 39 虎子盛溺器。欽定四庫全書『礼説』卷二、翰林院侍講、惠士奇撰、天官二。
- 40 褻器、清器、虎子之屬。
- 41 小兒神氣軟弱、精爽微羸、而神魂被鬼所持録。(為鬼所持候)。表題は「レ鬼レ所持候」である。「神魂被鬼所持録」の「被」が同様に「神魂レ為鬼所持録」と「為」になっていれば読みやすい。しかし、そうならないため、「被」と「所」をあわせて受身の形「らる」として訓読した。
- 42 欽定四庫全書、宋、陳思撰。
- 43 虎子 謝據、字玄通、吏部尚書裒第二子、小字虎子、號中郎。
- 44 忠懿王、小字、虎子。欽定四庫全書、檢討吳任臣撰『十國春秋』卷十七、南唐三、後主本紀。
- 45 「…元暉、復小名、虎子」。欽定四庫全書、翰林院檢討陳維崧撰『陳檢討』四六卷、十一、序、米紫來始存詞集序。
- 46 欽定四庫全書、元、陶宗儀撰『說郛』卷一百十八上、宋、陳達叟、『采異記』伏龜

山鐵銘。

- 47 欽定四庫全書、宋李昉等編『太平広記』卷三百一十八所収。
- 48 荀氏家伝曰、荀愷字茂伯、小而智。外祖晉宣王甚器之、字為虎子、弟惲為龍子。欽定四庫全書、宋李昉等撰『太平御覽』卷三百六十三、人事部四、字。
- 49 「蘇轍字子由、生子遼。小字虎兒、(東坡文集)」[「米友仁、字元暉。禮部員外郎元章子。小字虎兒、(山谷文集)」。※『山谷集』には、「虎兒」とみえるが、文章は同じではない。欽定四庫全書、書史會要、卷六、明、陶宗儀撰、宋に「米友仁、字元暉、小字虎兒」とみえる。
- 50 「劉湛字□仁小字班虎、宋本傳(□は欠字)」とみえる。
- 51 許長史中男、名聯、字元暉、小名虎牙、(眞誥)。※欽定四庫全書『眞誥』卷二十、梁、陶弘景撰、翼真檢第二、真胄世譜では、「小名」ではなく「少名」とされている。
- 52 司馬相如、字長卿、成都人、少名犬子。欽定四庫全書、『前漢書』卷五十七上、漢蘭台令史班固撰、顔師古注、司馬相如伝第二十七上。
- 53 宋明帝、嫌狗兒名鄙、改為敬兒。欽定四庫全書、『南史』卷四十五、唐、李延壽撰、列伝第三十五、張敬兒。
- 54 晉齊獻王、諱攸、字大猷、小字桃符。
- 55 崔浩、字伯源、白馬公宏子、小字桃簡。
- 56 桃が鬼を祓う植物であることは、拙著『不老不死』、講談社現代新書、1992年、「鬼は桃をおそれる」を参照。
- 57 薛志勤、蔚州奉誠人、小字鐵山。欽定四庫全書、『旧五代史』卷五十五、宋門下侍郎參知政事監修、国史薛居正等撰、唐書、第三十一、列伝七、薛志勤。
- 58 張敬達、字志通、代州人。小字、生鐵。前掲『旧五代史』卷七十、唐書、第四十六、列伝二十二、張敬達。
- 59 安重榮、小字鐵胡。欽定四庫全書、『五代史』卷五十一、宋、歐陽脩撰、雜伝、第三十九。
- 60 堅石、謝尚字。仁祖咸亭侯鯤子、小字堅石、…(世説叙録)。
- 61 石頭、桓熙、字伯道。南郡公温子、小字石頭、…(世説叙録)。
- 62 이승녕 지음、『心岳李崇寧全集』心岳李崇寧全集刊行委員会、2011年。
- 63 関西大学大学院、韓国の留学生。
- 64 2018年5月29日、関西大学大学院「中国哲学及哲学史」の授業の感想カード。
- 65 <https://ocw.kyoto-u.ac.jp/ja/general-education-jp/introduction-to-korean-studies/pdf/09.pdf>。水野直樹 朝鮮人の名前と歴史 2005年12月6日・19日、36頁に、16世

紀（李氏朝鮮時代）の村落文書。独立して居住し、姓名をもつ例として挙げられている。幼名とはされていない。なお水野氏には、「植民地期朝鮮の住民登録と名前に関する研究」研究代表者 水野直樹、平成18～19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））成果報告書、課題番号 1852053 [18520538]、A study on name changes and resident registration in colonial Korea。『創氏改名、日本の朝鮮支配の中で』岩波書店 2008.3 岩波新書、新赤版 1118 がある。

66 名と認ムベカラザル称呼

67 関西大学大学院中国人留学生。以下、すべて本人の了解を得ているが、仮名にした。

68 大阪府立大学大学院中国人留学生

69 関西大学大学院中国人留学生

70 関西大学大学院中国人留学生

71 関西大学大学院中国人留学生

72 日本随筆大成編輯部編、『日本随筆大成』吉川弘文館 1995年、第3期 4、所収。また[http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB\\_ID=G0003917KTM&C\\_CODE=0364-002301](http://base1.nijl.ac.jp/iview/Frame.jsp?DB_ID=G0003917KTM&C_CODE=0364-002301)

国文学研究資料館、大洲市立図書館蔵のものがある。

73 前掲拙著『魂のありか』260～264頁「くしゃみ」で詳しく考察。

74 南方熊楠未完文集、八坂書房、82頁。

75 前掲『不老不死』496頁。